

「メイドおじいちゃん」最優秀賞

まち・ひと・しごと創生支援事業

高齢者と共働き家庭つなぐ

常陽銀行

自治体職員と学生、常陽銀行若手職員が地方創生の具体事業作りを目指す2016年度「まち・ひと・しごと創生支援事業」(同行主催)の今年度最後となる第3回研究会が20日、つくば市吾妻の常陽つくばビルで行われた。この日はプレゼンテーションがあり、取手市職員がリーダーとなって、地域の子どもたちを預かる「メイドおじいちゃん MADE IN TORIDE」を発表したグループが最優秀賞に選ばれた。同行では今回の順位に関わらず、自治体から声がかかった案について実現に向けて支援するという。



「メイドおじいちゃん」を提案し、最優秀賞を受賞したメンバー(つくば市吾妻の常陽つくばビル)

県内22自治体の職員27人と学生、同行若手職員を8グループに分け、それぞれ地方創生に関わる具体事業を提案。採点は、自立性、官民協働、地域間連携、政策間連携、KPI(キーパフォーマンス指標)などを基準に行った。

2位は笠間市の魅力供給を増やし、都内の女性を呼びこむことを考えたグループ。3位は、観光ガイドアプリを作り、茨城を恋人の聖地としてブランド化を考えたグループだった。

審査員の宮田貞夫さん(県よろず支援拠点チーフコーディネーター)は、「質問を受けて萎縮することなく、改善してほしい」とア

イデアが実を結ぶことを期待。審査員で、既存の事業やサービスとの違いについて質問が出るなど、活発な交流が行われた。

5月の第1回研究会で「茨城の地方創生概要」のテーマで講義を受けた参加者は、6月の第2回でアイデアを磨き、第3回の今回は

最終のプレゼンテーションをした。

常陽銀行は、15年に市役所職員らと交えて、市町村向け総合戦略を策定。16年度は、具体事業の遂行と目標達成に向けた支援をテーマにしていた。

見込め、高齢者も生きがいを持てるという狙いだ。

もとは、共働き率ナンバー1というキーワードに反応した7人。学生のアイデアからアクティブシニアの活用を取り入れた。

最優秀賞を受賞した「メイドおじいちゃん」は、取手市役所の堀越健太さん(27)をリーダーに、牛久、神栖市、東海村の職員に筑波大、茨城大の学生を加えた7人グループ。共働き家庭と定年を迎えたアクティブシニアを結びつけるマッチングサイトの構築を提案した。

「共働き率」から発想

マッチングサイトの構築提案

発表によると、参加する高齢者に資格は不要だが、研修制度を設ける。利用者が安心して暮らすように写真付きでレビュー機能のあるマッチングサイトを作る。高齢者に来てもらう出張型と預かり所を作る店舗型の2タイプで事業を進めることを考えた。共働き家庭が増えると税収の増加が

リーダーの堀越さんは「(研究会で)他自治体の職員とテーブルを囲むことで地域性などについて理解が深まった」と振り返り、「高齢化を課題とする自治体は取手市だけではないので、他の市町村でもアイデアを活用してほしい」と満足げだった。

(山本一暁)